

【図書紹介】

渡邊美香著 『アグネス・マーチンの絵画における抽象表現と精神性 —感性の発達と生の意識を中心に—』

石川千佳子*

アグネス・マーチン¹⁾ (1912-2004) は、その初期作品が辰野登恵子と比較されるなど、日本でもよく知られたアメリカの抽象画家である。いわゆるグリッドによって、表現形式上はミニマリズムに分類されることが多い。

マーチンには制作の空白期があり、その後にグリッドからストライプへの造形上の変化がみられるが、現代美術の概論的な解説においては、後半の作品についての論及が薄くなりがちである。

そうしたマーチンの生涯と画業について、たんねんな文献および作品調査はもとより、制作者の観点に立った制作過程の追創造を含む作品論を展開し、美術における制作と鑑賞の一体化を図ったところに本書の独自性がある。

本書の構成は以下の通りである。

序章

第1章 アグネス・マーチンの藝術活動とその軌跡

第2章 グリッド絵画と感情のイメージ

第3章 藝術の機能と抽象表現

第4章 アグネス・マーチンの藝術と精神性 終章

博士論文にもとづく本書ならではの構想の大きさと、着実な論の運びを感じさせる章立てであるが、各章の表題からも、マーチンの人と芸術をトータルに捉えて、ミニマル・アートの文脈から語られてきた従来のマーチン像を相対化し、彼女が生涯を通して追究し続けた抽象表現の本質に迫ろうとする意図がみてとれる。

以下では、各章の流れに沿って、内容の特筆すべ

き論点を紹介していきたい。

まず第1章では、先行研究を幅広く参照しながら、マーチンの芸術活動の軌跡が経時的に論じられる。ここで注目すべきは、カナダ生まれのマーチンがアメリカに移住後、教育大学に進学して公立学校の教員からキャリアをスタートさせていることである。その後の1941年にはコロンビア大学教育学部に進学するが、その理由にJ. デューイの『経験としての藝術』の影響が推察される。また、この時期のニューヨークでM. ロスコやB. ニューマンらの抽象表現主義に出合っていることや、同大学では彼女のニューヨーク滞在の後ではあるが、鈴木大拙の講演が行われたことも指摘される²⁾。彼女とそれらの影響関係については、確たる資料的な裏づけがある訳ではなく背景に止まるが、後年の抽象絵画の精神性を考える上での伏線となっている。作品批評等では見落とされがちにだけに、キャリアの始点における美術教育との関わりは大切な指摘といえる。

続く第2章では、ミニマリズム絵画の指標というべきグリッドによって通常ミニマリストと評されるマーチンと、代表的なミニマリストであるF. ステラやD. ジャッド等の作品との決定的な差異が、マーチン自身の言葉を手がかりに論じ分けられ、著者自身がマーチンのグリッド絵画に直感した温かく包み込む印象の源泉が明らかにされていく。

事前に決定された最小限のパターンを反復し、物質性とコンセプトとを一体化させて、純粋な知覚によって作品を成立させようとしたミニマル・アートに対して、著者はマーチンの手記等を解説しながら、彼女が絵画において目指したのは知覚できない「無力な」心の状態の表現であったと述べる³⁾。

同じ抽象絵画でも、マーチンのように目に見えないことを表現しようとする隠喩としての絵画は、宗

* 放送大学 (The Open University of Japan)

教画を中心とする伝統的な絵画に継承されてきた概念であり、現代美術であれば崇高を志向した抽象表現主義にも色濃く反映されている。

本章を通して、ミニマリズムとマーチンの絵画との根本的な相違が示されるのに併せて、形式上の類似によって貼られたミニマリストのレッテルと彼女の自己表現との乖離の深刻さも浮き彫りにされる。

第3章では、制作の中断から復帰後のストライプ絵画における、マーチンの精神の深化について具体的に論じられるとともに、彼女の芸術観を通して得られた抽象表現の機能が以下の4つにまとめられて普遍化される⁴⁾。

- 1) 作品は媒体であり、感情の応答として〈鑑賞者の気づきが絵画をつくる〉という一つのコミュニケーションを実現する。
- 2) 作家が、感情の共有を呼び起こす美の感性(完全性への意識)を更新し、他者との感情の共有を試みる際、その藝術の主題は、個人的な感情ではなくより広範囲な感情=心の理想となる。
- 3) 藝術は、表現・鑑賞の創造的な活動として、制作者・鑑賞者の生の意識(インスピレーション)にもとづく美の発見として展開される。
- 4) 藝術は、鑑賞者の主観的な経験を引き出す感性や想像力を発達させる。

また、復帰後のマーチンが、絵画の目的は自由であるという確信を得て、表現のテーマを「喜び」、「幸福」、「純真」と自覚し、そこからさらに「賛美」、「生の祝福」として制作を進めることを表明して後の、ストライプ絵画を対象とした著者の作例分析が特に注目される。

分析というよりも現象学的な記述に近い印象を受けるのだが、国立国際美術館蔵の*Untitled#10*(1988)についての分析は、上述の3)にあるような表現と鑑賞を連関させた創造的活動の実践そのものであり、そこからマーチンが繰り返し線を引くときの心境が写経時に似た状態ではないかという、ユニークな見方が引き出されている⁵⁾。

こうしたマーチンの絵画と精神性に関する考察を受けて、絵画の背後にある思想を、特にアメリカの現代美術に大きな影響を与えた老荘思想や禅、自然観、生の意識といった観点から論じたのが第4章で

ある。

近代的な自我に囚われず、自己を大いなるものに抱かれた存在だと感得することによる安らぎには、現代のマインドフルネスにもつながる東洋思想の影響がみられる一方で、混沌とした自然と精神世界を峻別する態度には、古代ギリシア以来の形而上学としての哲学が影を落とす。

本章では、そうした矛盾もはらむ思想の内容をていねいに跡づけた結果、抽象的な感情を自由に受け止められるマーチンの抽象表現は、人に共通な「生」の意識を呼び起こそうとしたとされる。そして、形式を意識せずに空間に入って、美に対する鑑賞者の自由な応答を生み出す構造をもつ抽象絵画の、生の賛美に由来した喜びの感情が「生」の気づきを得ようとする鑑賞者の感性と共に更新されるという、作品と鑑賞者とのまさに幸福な関係が提言される⁶⁾。

140頁に及ぶ論考の詳細については到底筆の及ぶところでないが、アグネス・マーチンという一人の抽象画家を軸に、美術史的な作家論や現代美術批評、美術教育論といったジャンルを超えながら、それらの間を架橋する理論—制作—教育論を展開し、藝術と私たちのより良き生との本質的な連関を明証した本書の意義は高く評価されるべきだろう。

註

- 1) 「マーティン」と表記されることも多いが、本書の表記に合わせて以下マーチンに統一した。
- 2) 渡邊美香『アグネス・マーチンの絵画における抽象表現と精神性—感性の発達と生の意識を中心に—』風間書房 2023年 9-10頁
- 3) 渡邊 同上書 49-51頁
- 4) 渡邊 同上書 90-91頁
- 5) 渡邊 同上書 61-63頁
- 6) 渡邊 同上書 118-119頁